魅力ある県立高校づくり懇話会（第３回）議事録

１　日　時　平成２４年１２月２５日（火曜日）１４時～１６時
２　場　所　埼玉会館　５階５Ｂ会議室
３　出席者　渋谷座長、藤池副座長、小杉委員、熊谷委員、中村委員、戸ヶ崎委員、
　　工藤委員、山本委員、大出委員、佐藤委員
４　議　題
　県立高校の活性化・特色化の取組について
　（他県の特色ある高校の事例について紹介。
　　奈良県　教育コース
　　新潟県　国際大学進学コース（設置予定）
　　神奈川県　クリエイティブスクール）

座　長　事務局から、前半は埼玉県の県立高校の現状について、後半は他県の特色ある高等学校の説明があった。この他県の３つの事例は、それぞれ学力向上、グローバル化、社会化機能に対応する形で紹介されているようだ。跨る議論があってよいが、大枠はその順番で議論を進めて行きたい。早速だが学力向上の観点から、普通科高校について、現状や問題点あるいはアイデアなどを自由に議論したいと思う。

委　員　本県でもかつて様々な高校でコースを設けていたが、生徒募集で苦労するようになって廃止した高校が結構ある。中学生にすれば高校に入ることが第一目標であるため、高校入学の段階で自分の将来をどこまで考えられるかという問題がある。高校生でも、大学進学に際して自分がどの学部・学科に行ったらいいかわからない子が少なからずいる状況があるので、早い段階で決めるのは難しいのではないか。一旦コースを作ってしまうとなくすのはなかなか難しいので、最初からこのような形で募集するのはどうかと思う。それより、高校に入ってから２年生ぐらいから分かれる形で、資料の例で言えば教員になる人達を特に育てていきます、それはこういう教育課程でやっていきますという取組にした方がよいのではないか。教育課程を特色として出していくということは非常にいいことだと思う。

座　長　中学校３年生の実情を踏まえ、このようなやり方もあるという話であった。どのような観点でも結構である。他に意見はあるか。

委　員　大学教育ではっきり職業教育となっているのは教員と医薬である。そういった大学は、大学を選択した時点で職業を選択することになっているので、例で挙げられたようなコースがあっておかしくはないと思う。ただ、進路選択を先延ばしする傾向が進む中、１５歳で決められるかどうか。高校の後半で選択さ

せる方法もあるが、今度は受験という関門を突破するだけのものになりかねない。事例の高校でやられているのは、将来希望する職業について詳しく知ることで志望を強化するという、きめ細かなキャリア教育を行おうということだと思う。それならば意味があると思うが、高校の後半、例えば３年生になって設けたりすると、受験勉強のためだけとなり、ねらいに添ったものとならない可能性があるため、私はあまり積極的に賛成できない。

座　長　率直な意見を伺った。その他どうか。

委　員　県として高等学校の学力をこう捉えるという指針があっていいのではないか。子どもたちの力のコアになる部分は果してどう捉えられているのか。専門学科でも普通科でも、全員が身に付けるべきコアがどこまで明確になっているか。埼玉県の高校生はこういったものを育てていきたいというものをもっと出していかなければならない時代になっていると思う。

中学校では面接練習を行う時期であり、私も面談で生徒に将来何になりたいのか必ず聞くのだが、明確に答えられる子は非常に少ない。高校を選択するにあたってもっと考えないといけないよと指導するのだが、入ってみてからでないと分からない、どこでもいいから高校に行ってから考えたいと回答する子もいる。中には、目的意識を明確に持っている子もいるので、そういう子は目的意識に添ってどんどん伸ばす取組をしてもよいが、一方で、どの生徒にも共通した、埼玉県の高校生はこういうものを必ず身に付けるということもやっていかなければならないのではないか。

座　長　コアになる部分が大事ではないかという指摘であった。その他どうか。

委　員　事務局に質問だが、総合学科について現在どのように評価しているのか。総合学科は、多様な選択を可能にする学校という発想から始まったと思うが、なかなか思い通りにいっていないという話もあちこちで聞く。当初の目的通りに運営されていると考えているのか。

事務局　総合学科は多様な選択科目を設置して、将来の進路や興味・関心を考えながら生徒が自ら科目を選択して学ぶシステムであり、様々な希望を持つ生徒に対応するという面では成果が上がっていると思われる。一方で安易な科目選択によって、進路実現に必要となる科目を選択し損なうということも起きている。子どもたちが進路選択を先延ばしする現状の中で、とりあえず科目を選択して学習したものが、必ずしもその後の進路に生かすことができていない部分もある。

委　員　将来を見据え、勉強したいことを勉強できる環境を作るというのが総合学科のそもそもの発想にあった訳で、全く同じことがこういったコースでも起こり得るだろう。総合学科に入学し、多様な経験をする中で自分の方向を決め高等教育につながるのが理想的だとは思うが、現実には一つの高校の中で、果して

本当に多様な教育が十分できるかというと、物理的に難しくなかなか思うように展開できない状況だと思う。地域の学校間のように大きな範囲で移動するのならともかく、個々の選択に合ったコースを一つの高校の中だけでつくっていくのは難しいのではないかという気がする。

都市部の物理的に移動が容易な地域であれば、広域高校みたいな形もできるだろうが、地方ではそれは厳しいだろうし、すると地方と都市の格差もまた生まれてしまう。子ども達の発達に合わせ将来にうまくつなげていくという仕組みづくりが、理想はあるけれど現実には難しい。結局、学力のコアを保障することを中心に据え、選択肢の部分はちょっとできればいいとなるのかなというのが今の感想である。

座　長　１５歳で特化するのは如何なものか、そこをカバーするために総合学科のようなものを考えたときには、中途半端な面が出てきてしまうという話であった。他に意見はあるか。

委　員　総合学科のように県立高校が多様化しているが、普通科の不登校や退学率は減っているのか。また、普通科を中退している場合、どのような理由で退学しているのか。

事務局　普通科も含め埼玉県全体として以前より退学率は減少している。また普通科を中途退学した理由は様々だが、主なものは学業・学校生活不適応である。

委　員　より高いレベルを求める生徒には、例えば自己探求コースのような、生徒の目標目的に対応したやりたい勉強を自分でプランニングできるようなシステムやコースはできないかと思う。高校２年になるとほとんどの高校で文系・理系に分かれるので、そのあたりのタイミングで設けるのがよいのではないかと思う。

座　長　専門高校の立場からはどうか。

委　員　やはり進路の先延ばしという現状があって、１５歳では将来をなかなか決められず、とりあえず行ける学校に行くという発想になってしまう。専門高校に将来の希望を持たない生徒が入ってくる原因はそこにあると思う。話があったように、私も一つの高校で完結するのではなく、地域で複数の高校が連携して教育し合うようなシステムがもしできるのであれば非常にいいと思った。今も１学年が終わった段階での転入、転学があるが、そのような進路選択ができるようになるとまた一つ大きな特色になると感じている。

委　員　中学から高校に進学する段階で、教員になろうと決めている生徒はいなくはないだろうが、ちょっと時期尚早でないかという気がする。学力向上の視点で言えば、いわゆる進学校や中堅校などそれぞれの学校の生徒の実態やニーズ、保護者のニーズに合った学力向上のための指導があると思う。例えば、進学校と言われる県立高校では、合宿や早朝学習、夏季進学講習といった大学進学率

や難関校への進学実績を上げるための色々な工夫をされている。進学校はそういうところに力を入れることが更に必要になってくるだろう。いわゆる中堅校はやはり基礎基本の部分で、中学校でも当然基礎基本の部分は指導しているが不十分なところもあるのでそれを養ってもらって、生徒に自信をつけさせ、大学や専門学校など次の進路を考えるための実力をつけてあげることが重要だと思う。今も生徒の実態やニーズに合った指導をやっているだろうが、それをさらに明確に示して、うちの高校は難関校に入れるような指導をしていきます、またはうちの高校は基礎基本の部分を育成して中堅大学や専門学校に入れる実力をつけていきます、と掲げてもいいのではないか。すると、生徒の側も、私はここの高校に行こう、と目的意識を持って進学できるのではないか。公立高校はどの学校も同じようにという時代ではないと思う。私学はアピールする中で色々なことをやっており、公立高校もそれぞれ学校に合った目標を掲げてはどうか。

委　員　先ほどの発言の補足も含めて話をしたいと思うが、選択の先延ばしが起こっているのは確かであるが、それを放置していいという話でもないと思う。やはり高校段階は、その後に向けて何か働きかけが必要な時期だと思う。一番の課題として言われているのは、いわゆる中堅校からその下の学校の生徒達が勉強をしなくなったことである。これは調査などではっきりしているが、校外で勉強する時間がほとんどない高校生が圧倒的に多くなっている。勉強しないことが普通の高校生の姿になってきている。そのような子たちに勉強することの大切さをどう伝えていくかという中で、進路決定に対する働きかけも自然と出てくると思う。そこがキャリア教育として考えなればならない大事なところであり、勉強することが大事だと生徒に分かってもらえる教育としてのキャリア教育が普通科の中堅校に一番必要ではないか。

座　長　特化の前になぜ学ぶのかの喚起が必要との意見であった。その他どうか。

委　員　全く同感で、中堅校の学力向上は非常に大きな課題だと思う。先ほどコアの話をしたが、要は高校に入って何をどの程度身に付けたのかが見えてこない。進学校には大学の進学実績があるがそれはある一面であって、進学校も中堅校もそれぞれ、こういう力をこの程度身に付けられますと言えるようになっていくことが、中学校まで含めたキャリア教育の充実にまでつながると思う。この学校に行けばこういう力が身に付けられますというものが見えていれば、そこを目指して中学校で勉強しなければいけないこと、努力しなければならないことが見えてくるだろうし、最終的には将来の職業選択にもつながるだろう。それぞれの高校で何が身につくかを明確に出していくことに加え、全ての子どもに共通して最低限こういう力がつきますということが見えてくれば、全体の底上げにもつながるだろうし、大胆な提案になるが、それぞれの学校の到達の度

合いを計る県共通のテストを行うこともできるのではないか。

座　長　将来的にそのような若者を迎える産業界から何か意見があるか。

副座長　前回も話をしたが、普通高校に行けないから専門高校に行くというのは私としては本当に腹が立つ。専門高校は、電気がやりたい、機械をやりたいなど中学卒業の段階である程度の指針を持っている子が自ら望んで行くべきであって、まだ何をやったらいいか分からない子は普通高校に行けばいい。中学で指針ができていない子は、普通高校で色んな教育を受ける中で、自分が将来何になりたいかをまた学べばよい。それは先送りであると同時に先送りではないと思っていて、中学を卒業した段階での交友範囲は近所の友達に限られがちだが、高校に行くと今度は他の市の友達が増える。大学に行くと全国に広がる。より上位の学校へ進学することで、色々な幅が広くなるのは教育の一つの大事な要素だと思っていて、広がった幅の中で将来何になりたいかの結論を出せばよいと思う。

だから、私は医者や音楽家などある程度指針が決まっている子は、事例のような特殊な学校に行かないと遅れてしまうと思う。都会のように私学に通うという選択肢がない地方では特にそうではないか。経済的に私立に通えない、または家から遠くて通えないという子は県立高校へ行くだろう。入試があるので生徒はある程度同じレベルになるだろうがそれでも一人一人違いがある中で、もっと先に進みたいという子がいても集団の中で足踏みをしてしまう。事例のような高校ができたのも、そういう背景があるのではと感じている。そういう背景があってニーズがないとこういう取組はできないのではないか。

子どもがしばしば親と同じ職業に就くことがあるのは、例えば医者の子は、生まれ育った環境の中で自分は医者になるという指針が自然とできてくる。だから自分で勉強する。指針が決まっていれば、どういう努力をすればいいか分かる訳である。前回も少し話したが、知り合いのピアニストになった子は、なぜ学校で蛙のお腹を切って解剖しなければならないのか疑問だったと。指針が決まっている子は、そういうことをしている暇がないと感じている。けれども、時に学校の中ではそれは劣等生にもなってしまう。

一方で、目的の分からない子は、どういう努力をしたらよいか分からないから、こんな努力をしてみた、あんな努力もしてみた、でも最終的にはあの方面に行くことにしました、となる。すると、前のほうでした努力は、色々な資質を蓄えるので無駄とは言いきれないが、やはりそれだけ遅れをとるわけである。若いうちは色々なことを知ることも必要という考えもあっていいし、それが良い意味での中庸につながればいいが、意外とそうならないこともある。事例のような学校が出てきたのは、やはり私は必然性があってのことだと思う。

座　長　今、初めて生徒の目標目的に対応した高校の意義が確認できたような気がす

る。だいぶ議論が白熱してきたが、他に如何か。

委　員　学力向上について、本県には旧制学校を母体とした進学校があり、県民もそれを認めている状況があると思う。現在、本県では伊奈学園高校で中高一貫教育を行っているが、中高一貫の学校が非常に少ない。千葉県では進学校の千葉高校で中高一貫教育を行っており、将来は国の中枢を担う人材を育てるという観点からは、中高一貫の進学校で早くからそういった道を歩むルートがあってもいいと思う。

委　員　私の勤務している高校は、かつては進学校と言われていたが今は中堅校と周囲から見られている。以前のような評価を取り戻そうと頑張っているが、まだ十分な成果を上げられていない。そういう状況を見ていると、私学との競争もある中で、今後、埼玉県として中堅校をどのように伸ばしていくかが非常に重要だと思っている。進学校は家庭の教育力や経済力に助けられ、ある程度必ず伸びていく部分があるが、中堅校は場合によっては落ちていってしまう怖さがある。

私立高校の方が優れていると県立高校に対して厳しい目で見ている県民もいる中で、県立高校でもしっかりした力が身につきますと保護者や子どもにアピールしていくのであれば、数も多い中堅校をいかに伸ばしていくかが、これからの埼玉県の教育にとって非常に大事になってくると思う。

座　長　学力向上について色々な角度から発言をいただいた。私自身が教員養成学部に所属している関係でこの事例は興味深く見させていただいたが、大学との連携が重要になってくると感じた。高校生の思いと高校の思いだけではおそらく上手くいかないのではないか。事例の高校では、近隣の大学と色々連携しているようであり、大学との連携を密に行って初めて、目的に添った高校生の養成が可能になるのではないか。気になるのは、その学校の資料を調べてみると初年度は非常に成果が高いが、２年目、３年目とやや最初の頃の勢いが落ちているような感じがした。

話題を次に進めたい。大きなテーマとしては社会のグローバル化に高校教育はどう対応するかという観点である。

委　員　私の知り合いにも留学している人がいるが「日本の文化はどのような文化ですか。」と聞かれた時に答えられない留学生がかなりいる。これからの日本を背負っていく若い人材には、日本文化の発信力になってもらいたいと思う。グローバル社会に対応した人材育成として、将来を見据え現在よりも上のレベルの教育をやる学科をつくるのであれば、日本文化をしっかりと教えて欲しいと思う。

副座長　英語が喋れるというだけで海外へ行って通用するか疑問に思っている。日本の歴史も分からない、日本について十分説明できないような有様で海外に行っ

ても、海外ではディベートを結構やるが、そこで日本に対し厳しいことを言われても何の反論もできなかったりする。グローバル化を考える上では、護国の精神を根底に据えないといけないと思う。やはり国を護るという確固たる精神、基軸があって初めて、色々な国の方々と喋ることができると思う。それが揺らいだまま国際人としてやっていけるかは疑問であり、やはり考え方という鎧をちゃんと着せてから外に出さないといけないと思う。だから、やはり大学を出てある程度のものを身に付けてから外に出る方がよいと思う。高校でやるのを反対とは言わないが、そのような観点を持ってグローバル社会に出ていく人材育成をやってもらいたい。

座　長　埼玉県にこのようなグローバル化に対応したタイプの学校が必要だとはあまり思えないのだが、皆さんはどうか。

委　員　私も、ぜひともとは思わないが、日本の大学より海外の大学に行った方が有利だと考える若い人たちが増えているのは事実だと思う。若い人たちの中に、海外に行った方が自分の将来が拓けるという感覚があって、海外大学への進学をサポートする学校に行く高校生も増えている。

委　員　ある私立大学の附属高校の生徒達と話をした時、このままでは日本がだめになる、日本を立て直すために海外に行って勉強したいと言っていた。系列の大学は国内でもトップクラスで卒業後の就職も引く手数多であるにもかかわらず、である。県立の進学校の生徒と話をした時も同じようなことを聞いた。日本を引っ張っていこうという志を持っている子ども達もいるのだから、日本のリーダーとなるような、また世界のかけ橋となるような人材を育てるような高校も一つルートとしてあってもいいのかなと思う。それは子ども達の話を聞いて学ばせてもらったと感じている。

委　員　やはりグローバル化、国際化は避けて通れないと思う。これからの日本経済を考えれば、アジアというあれだけ大きな発展途上のマーケットがある以上、地理的な優位性を考えたら、資源もない日本はアジアとの貿易を盛んにし、景気を浮上させていかないとならないだろう。実際に企業もどんどん進出している訳で、グローバル化という視点は高校の段階から何らかの形で学ばせていくことが大切だと思う。

座　長　高校を丸ごと特化する手もあるし、普通科高校の中にそういうカリキュラムを入れるといった、二つのやり方があるだろう。

委　員　企業が必要とするグローバル人材の調査をやっているのだが、今、日本企業が必要としているのは若い人ではない。日本の企業がアジアに出ていき工場を作ったりするが、そこで働いている若い世代は現地の人である。現在は、国内で十分経験を積んだ中堅の人たちが現地の工場なりをコントロールする段階なので、一番必要なのは中年層のグローバル人材となっている。だから、今すぐ

高校でグローバル化に対応した教育を、という話にはならないとは思う。

ただ、将来を考えると、先ほど高校から大学に行くことでより視野が広がるという話があったが、海外に出ることで国際的な視野を持つ、日本文化を理解するのとあわせ、違う文化の違う社会を理解する視野の広さを持つ。それは、これからの時代に大事なところなので、そのようなものを養成する選択肢は確かにあると思う。それが海外大学進学コースでよいのかは分からないが、グローバル化というよりリーダーとして必要な幅広い視野を高校から身につけさせるという道筋はあると思う。

委　員　平成２３年度から、県でも高校生をマサチューセッツ工科大学などの海外大学に派遣する取組を始めていて、参加した生徒が３年生になってどのような進路を選択するのか注目している。本県では外国の高校と交流をやっている高校が結構あって、本校もオーストラリアの高校と行っている。

また大学にいった本校の卒業生が、留学するのに必要ということで高校の調査書を取りに来るが、校長として今年度だけで２０通以上サインしている。短期か長期かは分からないが、このように外国に出て行っている子達はいるので、高校時代に外国との交流を経験させておけば、後は経済力もあるが、出ていく子は少なからずいるのではないかと思う。

委　員　私が新任で採用されて赴任した高校は外国語科があったので、国際化について色々と考えさせられた。ＡＬＴや海外の方に授業を見ていただいたことがあるが、彼らが授業でＷｈｙ？と言う。Ｗｈｙ？Ｗｈｙ？と何回も。ある程度学力のある子ども達がその問いかけに全く答えられなくて、いったい日本ではどのような教育をしているのか、なぜって聞かれて何で答えられないのかと後で聞かれたことがあった。そういったことがあって、国際性についてどう教育していかなければならないか校内で議論になった。そこで、暗記も大事だし、知識を積み重ねていくことも大事である。しかし、自分の考えをその裏付けとともに、私はこうだからこう思うのですと言える力を持たせなければいけない、それが世界に通用するためにはとても大事だという話になったことがあった。

国際教育では、相手の文化と私たちの文化は絶対的に違うので、まず違いを認めないとスタートしない。違いを認めた上でそこからお互い歩み寄って共通点を探し、何か新しいものを生み出すという教育をしていった時に、それまで結構あった生徒間のトラブルが無くなった。その高校には、エリート意識が強く周囲を少し見下しているような子や、元気はいいがちょっと感情に流されがちな子など色々な子がいたが、互いを認め合うようになってトラブルが無くなった。

座　長　貴重な話であった。次のテーマに移りたいと思う。事例の高校で、少人数学級編成でかつ複数担任制を敷いている点に私は注目したが、こういった事例は

埼玉県にはまだないのか。

事務局　学校の努力によって少人数の学級編成を行っている学校はある。例えば、１クラス４０人の学級を少人数に分けて、それぞれに担任を配置するという取組を行っている学校はある。

委　員　高校進学率が９８％の時代であるから、学力的に厳しい生徒も高校を目指してくる。そういう子ども達は、やはり高校に入ってもう一度学び直しをすることが必要だと思う。こういう学校は入試をやれば生徒が集まらなくなってしまう。このような学校を減らすと学びの保障を奪うことになると私は思う。

座　長　入試なしで希望だけで入学できる学校が必要という意見であった。

委　員　事例で紹介された高校でバイターンという取組が出てきたのも、彼らはアルバイトをしなければ生活していけないので、彼らの将来のためになるとともに、そのまま教育ができるような仕組みを考えようと始まったものである。一番大事なのは、この学校には教員がたくさんいることである。こういう子達の教育こそたくさん人手がかかる教育であり、だから、国の事業など色々なものを積極的に取りにいき、外部の資源も入れて人をたくさん充てられるようにしてやっているのだが、外部の資源と学校や生徒を繋ぐ役割を教員が担わなければうまく機能しない。言い換えれば、教員がその役割を担えるだけの余力を持てる仕組みが必要である。私もこういう学校は必要だと思うし、ぜひこういう学校には教員を多く配置してくださいと言っている。

座　長　前回も話題になったが、こういう教育は当の子どもたち本人にとっての為でもあるし、税金が払えるような社会人を育てていけば多少先行投資で人件費が掛かるかもしれないけれど、最終的に社会や国のためになる、という理解でよいか。

委　員　そのような理解でよい。

委　員　基礎学力に課題があるような高校で、そもそも５０分間の授業は成り立つのか。生徒が教室から出て行ってしまうようなことはないのか。

事務局　教員も授業内容や教材などを日々工夫して、生徒の実態に合わせた学習指導を行っており、授業が成り立っていない高校があるという情報はない。

副座長　体育系のような運動面で特色がある学校というのは聞いたことがないが、そういう学校はあるのか伺いたい。

事務局　本年度は体育科を置いている学校が２校、普通科体育コースを置いている学校が３校ある。

副座長　それは外部に周知されていて、中学校や生徒も良く分かっているのか。あまり話題になっていないようだが。

事務局　入試の段階で中学生や中学校に広報をしている。スポーツに力を入れている私立高校が躍進しているため県立高校はちょっと影が薄い面はあるが、インタ

ーハイ等の大会で活躍している生徒もいる。

副座長　レベルの高い進学校では先生のモチベーションも高いだろうが、生徒の状況によっては、いくら頑張ってもどうしようもない、と先生のモチベーションが下がったりはしないのか。

委　員　本校でも、まず生徒のやる気を出させるという段階で教員が苦労している。授業が成立しているかという話が先ほどあったが、やる気のある子ももちろんいるが、何分の一かの生徒が寝ていることも珍しくはない。そういう中で、教員の多忙感と疲労感が非常に強くて、先生方の毎日のモチベーションを保つのが非常に大変である。打てば響く生徒ばかりではないため、教員の側から一生懸命色々と働きかけをしていくのだが、最後は裏切られてしまうようなこともある。このままでは、いずれ人事異動において、本校のような学校を希望する先生がいなくなってしまうのではないかと心配している。

先ほど他の委員の発言にあったように、手が掛かる子達をたくさん抱えている学校はやはり人手が欲しい。外部に人を求め、企業の方に来ていただくなど地域の力を借りてやっているが、やはり教員の数を増やす、そういう志を持った方に来ていただくなどの施策をしていかない限り、今の状況を変えていくのはかなり厳しいと思う。そういう子どもの面倒を見る学校という位置付けでやるのであれば、やはりそれなりの人材と費用の投資があって然るべきでないかと考えている。

座　長　副座長から非常に核心をついた指摘があった。教師のことをどう考えるかは重要なポイントだと思うが、この懇話会としてこういった話はどこまで掘り下げていいのか。

事務局　こういうタイプの学校に人を多く配置する必要があるというような議論は、学校の在り方にかかるものであり、懇話会の議論の対象になると思う。

副座長　先日、ある工業高校にお邪魔する機会があって３時間ぐらい校内を視察したのだが、地域の建築業の方が生徒と一緒に色々やられているのを見たが、あれはよいと思う。こういうことができればこういう職業に就ける、こういうことができればお金がもらえるというのが明確になるだろう。

委　員　事例にあるような社会的自立を支援するタイプの高校というと、生徒指導が難しいというイメージがあって、私自身その大変さは非常によく分かる。ただ発想を変えていくと、社会的自立や市民性といったものは学校の勉強ができるだけでは身につかないため、それをどう身につけさせるかは進学校の子ども達にも当てはまる内容だと思う。そういった教育の研究に先進的に取り組む学校として位置付けることが重要で、その裏付けとして人的配置や環境整備にもっとお金をかけていかないと、先生方のモチベーションにも関わってきてしまうと思う。

委　員　各高校のＰＴＡや保護者の方とよく話をするが、校長先生が学力向上といった目標を立てる。立てたけれども校長先生が２年ぐらいで代わってしまう。そうすると保護者も生徒も目標はどうなるのかと感じるし、目標が継続性を持たなくなるケースがあるのではないかと思う。特色を出す、目標を設定するというのはある程度継続性がないとできないと思うので、学校の経営者である校長先生が経営目標を立てたら、やはり４、５年はやってもらいたいと思う。２年ぐらいで代わったら取組の成果検証もできないのではないか。ある程度のスパンをもって、先ほど話のあったような特に中間層、中堅校への取組を進めていただきたいと思う。

座　長　非常に鋭い指摘である。

委　員　本校は夜間定時制を併設しているが、定時制の子ども達と話をすると、本当はやはり昼間の学校に行きたいのだろうなと感じる。全定併置校なので教室を共用していて、本校の場合は全日制の１年生の教室が定時制との共用となっている。午後５時までは全日制の生徒が使っているので、定時制の生徒は５時以降に登校することになっており、早く来て勉強や先生と話がしたいという定時制の生徒もいるが来るに来られない。そういう様子を見ていると、将来的には、全定併置校は多部制定時制高校のように単独校にしていくのがあるべき姿ではないかと思う。

本校の定時制は、若い教員がよく生徒の面倒を見てくれていて、退学もかなり少なくなってきた。色々な課題を抱えながら高校だけは卒業させようと取り組んでいる。ラーニングサポートで大学生が来てくれるなど、色々と人の面で県が支援してくれているのは非常に助かっている。そのような支援はぜひ引き続きやっていただきたいと思う。

座　長　この後は、振り返りも含め、全般に渡ってご意見があればいただきたい。

委　員　特色化を進める一方で、やはりコアになるものの重要性を確認する必要がある。学力としてのコアと、市民性あるいは自立の力というコアの部分。高校生はこれを必ず身につける、こういう力がつくというコアを明確にすることが必要だと思う。

委　員　先ほど進学校は進学実績を上げるという目標を持ってという話をしたが、それと同時に、どの学校でも社会の一員になるための社会化機能、一言で言えばキャリア教育かもしれないが、体験活動を充実させていただきたいと考えている。体験活動をすることで「私も社会の役に立てるんだ。」と実感し自信を持つことで、「自分も社会に出て頑張ろう。」という次の進路への目的意識を持ってくれると思う。これはすべての高校にあてはまることだと思うが、特に中堅校や生徒指導で課題のあるような学校では、ぜひ、生徒に目的意識を持たせる体験活動を充実させていただきたいと思う。

私の市の小学校の運動会で中学生が走ったことがあって、陸上部の生徒ではないので走りが格好いいわけではないのだがびゅんびゅんと走る姿を見て「すごい。」と小学生が歓声を上げていた。同じように高校生が地域の小中学校に来て、例えば部活動で培った技を見せれば、子どもたちは「すごいな。」と感じるだろうし「自分も頑張れる。」という意識も出てくると思う。小中学校は元々、地域と密接につながっている特性があるが、県立高校もぜひ地域の中に入っていき、地域との連携を更に深める取組を進めてもらい、子ども達はその中で色々な体験をするという形がよいと思う。

委　員　私は保護者の観点が気になっていて、保護者はこのようなコースなど普通科を色々細かい部分に分けることを望んでいるのだろうか。専門学科でも内容が細分化され色々な学科ができたがその効果には疑問を持っていて、これからは工業なら機械科、商業なら商業科といった基本の学科に集約、収斂されていく気がしている。コースや学科を作ることで魅力を生み出すより、学校として必要なことをきちんとやることに戻るべき時期ではないかと考えている。

副座長　教育というのは、やはり生徒に対してやる気という火をつけてもらいたい。これをやるんだという火をつけてくれるような教育をお願いしたいと思う。

座　長　時間が来たので、本日の議論はこれで終わりたいと思う。

（以上）